

《特別講演》

第5回 IFORS 会議に参加して†

第1講演

原 野 秀 永\*

私は今回ベニスにおいて開催された第5回 IFORS に日本代表として工大の松田先生と一緒に出席しました。大会が実際にどのように行なわれたか、そこでどんな話があり、どんなディスカッションが行なわれたかということは、チェアマンをされました松田先生から伺うとして、私は主に事務的な面について申し上げたいと思います。

私がまいりました一番大きな仕事は、1972年に日本が IFORS の第6回を引き受けるということを用意しておりました、実際にそういうことをする場合どういうふうに計画運営したらいいかということを知るために、まいったわけです。しかしあとで申しますようにいろいろな事情により、72年日本開催は見送らなければならなくなり、そのあたりの事情を少しお話してみたいと思います。

ことし4月末の理事会で、72年に日本で IFORS を開くということに対する可否をディスカッションし、そのとき皆さんは、やれるだろう、引き受けようじゃないかという決定をしまして、一応引き受けるという返事を IFORS 本部に連絡しました。そのとき、どういうふうにして引き受けるかということの詳細については、第5回の学会に出てみて、その状況でもってきめたらいいじゃないかという、比較的のんびりした考えを持っておりました。実際第5回 IFORS が近づいてくると、IFORS よりローカル・アレンジメントはどうしているのか、ほんとうに日本 OR 学会はやる意思があるのかどうか、というような問合せが手紙や電報でまいりました。

そこで真剣にわれわれはディスカッションを始めたところ、1970年というのは、安保改訂に対する問題等でおそらくたいへんなことになるであろうと思われる。学校はおそらく授業はできないであろうし、国内は物情騒然となるであろうという見込みをわれわれは立てました。このような状況が回復するのに1年はかかる。そうなれば1年間は学校の先生方のご協力を得るのは不可能である。そして72年になった場合には——それから1年たっているので状況としてはかなりよくなるかもしれないが——すべての状況が少し危いのじゃないだろうか。という考えで、前回下した決定の再検討をせまられました。そこで各理事がディスカッションしたのですが、あまり明確な結論は出ないままに、私はベニスに向けて出発しました。

† 1969年10月28日 秋季研究発表会講演。

\* 東京芝浦電気K. K.

そのあと緊急の常務理事会を開いてディスカッションしましたところ、一応72年は断わったほうがいいのじゃないかという結論になり、私がローマにいるときに電話を、断われという電話を受けました。いままではやりたいという意思の表明をし、IFORSも日本がやるつもりでいたようですが、それを断わることになってわれわれも非常にあわてたわけです。ところがアイルランドが立候補しているという話を現地でも聞きまして、われわれが断わってもなんとかなるのじゃないかという考えで会議に臨みました。

そして6月22日——レジストレーションをする日ですが——3時からインフォーマルな打ち合わせがあるので(そのとき私は時間の都合で行けませんでしたので)、松田先生に出させていただいて、日本の状況をお話願って、大体OKを取りつけたという状態で、6月25日、IFORSの理事会の席上で正式な表明をしようということで松田先生と打ち合わせをいたしました。

そして6月25日になって、いろいろな議事がございましたけれども、日本はとてできないということを表明し、ついでアイルランドが72年に開催したいという意思の表明があり、その場で、アイルランドがやりたいというのなら結構じゃないかという決定がありました。

アイルランドのやり方というのは非常にスマートでございまして、まず自分のところでやりたいという立候補の演説をする。同時に、詳細は旅行のエージェントに聞いてくれということで、エージェントがすっかり準備を整えており、どこでやるか(ダブリンでやる)、どこの施設を使ってやるか、その近所のアイルランドの名所はこうだ、というようなパンフレットまで全部準備して、それを全理事に配り、さらに手際のいいことには、おみやげまでちゃんとそろえて出すといった非常にスマートなやり方をしたわけです。

もしわれわれが今度やるとしたら、かなりこのようなPRも必要じゃないでしょうか? 日本のように、やる前になってまだガタガタしていて、いざやろうというときには断わるということでは、恥の上塗りということになります。

それでアイルランドの立候補は、一応理事会で受理されたわけです。しかし、さらに各国に、正式にアイルランドにしていいかという質問が發送されております。それに対して日本OR学会はOKという返事を出しておきました。したがって72年にはアイルランドのダブリンで行なわれることになりました。

実はダブリンで行なうといいましても、私はできるのかなという心配がございまして。と申しますのは、北アイルランドはご承知のようにいま暴動が起きており、このようなことがあって一体すぐ隣りのアイルランドで開催できるのかどうか、ちょっと問題があると思います。しかしアイルランド側は一応やる決心をしております。

そして次々回の75年には日本でやりたいという考えでおったのですが、この理事会で75年にはカナダが立候補しました。われわれも75年にはやりたいという意思だけは表明しておきましたが、これにはいろいろな問題があって、正式に表明するにはかなり紆余曲折があると思います。一応この理事会では75年にはやりたいのだという意思の表明はしておきました。

さて、帰ってまいりまして常務理事会において72年は開催できなかったけれども、75年にはやれるのかどうか、ということディスカッションいたしました。常務理事だけでは意見がまとま

らないので、評議員の方々に書面でご意見を伺いました。票数からいけば圧倒的にやったほうが良いという意見でしたが、ただ、内容を詳細に検討するとかなり問題があることが判明しました。問題というのはいくつかありますが、一番問題になるのはやはり学会が弱体であることでした。理事会においても体質を強化するのが先決じゃないだろうかという結論に達しました。そのためにいくつかの方策をわれわれはこれからとっていくと思いますが、来年の9月までにそういう方策が一応軌道に乗ったならば、その時点でもう一度考慮しよう、それまでは一応白紙ということにしておいた方がよい、それでもおそくはないという考えで学会は進んでおります。

どんな方策かと申しますと、学会がまだ法人化しておりません。資金面にも問題がある、また事務局その他の面でもいろいろ問題があるので、そういう面の強化をはかってゆきたい、学会強化を第一に考えようということになっております。5年先、6年先のことになると国際情勢、国内情勢がどうなるかということはよくわかりませんから、結局自分たちの力をつけておくことが一番必要じゃないだろうか。このように考えております。

実は IFORS に出席するときに、最初は学会をやるということで出席したのに、事志と違いまして、断わりのことを言わなければならなくなりました。非常に残念に思います。これは個人の意見ですが、なんとかして学会を75年には日本でやりたい。そのためには学会をできるだけ強化し、体質を改善することが先決ではないかということを考えております。

第5回の IFORS の話になりますが、開催された場所はイタリアの水の都で有名なベニスの、本島からモーターボートで15分ほど離れたリドという非常にきれいな島です。ここは別荘とホテルしかありませんで、あとはイタリア人の店とカジノがあるぐらい、ほんとうに静かないい海水浴場です。そこのホテル、エグセルジアという、欧州でトップより何番目というホテルで開催されました。これは余談ですが、私が帰ってエグセルジアというホテルに泊まったと申しましたら、おまえが一生かかっても決して泊まれない豪華なホテルに泊まったんだ、と言われて驚いた次第です。

開会式だけはベニス本島の有名なサンマルコ寺院のすぐ横にあるデュカーレ宮殿——これは旧い市長の邸宅だったそうですが、日本でいえばちょうど本願寺のようになりかなり由緒のある建物ですが——で行なわれました。それで、いかにもイタリア的な話ですが、そういう行事はきわめてはなやかに行なわれましたが、実際の会議の運営に至っては穴だらけで、われわれ見ているとはがゆいぐらい欠点が多かったようです。もし日本でやれたなら、もう少しうまくやれたのと思う次第です。

22日に受け付けまして、23、24、25、26、27日の5日間会議が行なわれました。それで23日の午前中にデュカーレ宮殿で開会式があり、これにはイタリアの高官が出席し、IFORSの会長といった人々が雛壇に並びました。そしてカトリックの国の特徴でしょうか、朱の衣を着たお坊さんが最前列に坐って、その横に警官がヘルメットをつけ、白い手袋をつけて直立不動の姿で立っていると、重々しい儀式として始められました。

イタリア人というのは背伸びをして、かなりはなやかなことをやる国民ですが、形式的には、ちょっと日本でやってもあれだけの演出はやれないというようなこった演出が行なわれました。

しかしそのスピーチに対してはちょっとがっかりしました。多分ベニスの市長だったと思いますが、OR の話はそっちのけにして、自分の政見演説をするというような、開会式にちょっとそぐわないような風景も見られました。

22日の夜にはカクテルパーティがあり、また22日の午後からカンファレンスが始まり、26日までカンファレンスが開かれました。これはホテル・エグゼルジアのホールで開かれました。23日の夜にはカンパリパーティといって、日本でいえば焼酎で一ぱいというぐらいの非常に軽いパーティが行なわれました。これは各国の代表が会員を招くという形で、インビテーション・カードを各国の代表が発行して、招かれた人が20人か30人グループになってお互いに親睦をはかるという形になっております。

23日は午前中、ボートトリップで、ベニス湾内のムラノのガラス工場と古い寺院を見物しました。この日は一般には何もごさいません。23日の午後からさっき申しました理事会が開かれまして種々の討議が行なわれました。そして24日、25日はカンファレンスが開かれ、25日の夜バンケットがあって、それで第5回 IFORS は終了するといったスケジュールになっております。

それで全体の運営を見てみますと、非常に不手際でした。たとえばレジストレーションをして、一体いまだこの国の人が何人来ているのか、また誰々さんは来ているかいないかということが事務局ではつかんでいない。参加した人のリストがわかったのは会議の終わる1日前の24日でした。しかもそのリストは間違いが多く、たとえばイギリスの人は、おれはアメリカ人になっているけれどもどうしたのか、といったことがところどころで聞かれました。

もしほんとうにこれをやるのなら、電子計算機でも使ってもうまくやれば、もっと簡単にできたのにそのようなことは何もやっていませんでした。ただし電子計算機はディスプレイ用に GE、IBM およびレミントンが各1台ずつ端末を持ちこんで、それでディスプレイをやっているわけですから、そういうものを使ってレジストレーションをやれば、もっと簡単にできたと思いました。人数が何人来たかということも最後にわかったような次第で、われわれは約400人ぐらいということで、会期中ははっきりわかっていたわけです。

それから大会の資料を毎日出していますが、その資料を印刷するのに非常に手間がかかり（これはイタリーの特性かもしれませんが）、要するに資料を印刷してくれと言ってできあがるまでに約2日かかる。そして3日目じゃないと資料がもらえないということで、非常に混乱していました。

それから、会議をやることについては初歩的なことだと思いますが、スライドがなかったり、黒板が足りなかったために、松田先生のように他の部屋から黒板をかついできてディスカッションに使うというような、そういう不手際もありました。

これはわれわれが国際会議をやる場合に非常に注意しなければいけないし、運営という点は非常にむずかしいと思います（国語、風習の差等が重要です）。国内の会議でも運営は簡単じゃごさいません。今度も名古屋の方にはずいぶん厄介をかけたと思いますが、国際会議ではこれが桁違いにむずかしくなると思います。このようなことに慣れてない人たちが集まった場合には相対前もって綿密な計画を立てておかなければうまくいかないのじゃないかということを感じたわ

けです。この意味でも学会の強化は必要でしょう。

会議の進行は従来の会議とずいぶん違っていて、チェアマンがそのセッションの人の論文に全部目を通して、そのアブストラクトを最初にチェアマンが話します。だれだれはどのようなことを言っているということで話をし、そのあとでスピーカーは、自分が論文を出した以降にやったこと、意見のあること、そういうものについて話す。それからフロアーからはそういうことに対するディスカッションをやる、という形式になっており、1つの論文を克明に最初から説明していくことになっているわれわれにとっては、非常に異様な気がしました。これはある意味でいえば非常に便利でして、アブストラクトさえ読んでおけば、どんなことを言っているかは大体見当がつきます。

それからディスカッションのやり方も、解放的というか、人によっては非常にしかつめらしいディスカッションもありますけれども、大体において非常にフリーである。たとえばチェアマンはパイプを口にくわえながら、スピーカーの横の床の上にちゃんと腰をかけて聞きながら、フロアーとの対話に横やりを入れて笑わせるという、非常に緊張しない、いわゆる会議のストレスを感じないような会議であったというのが特徴だと思います。こういう会議の運営の仕方がいいか悪いかはこれから考えなければいけないと思いますが、そういう点で私たち国際会議というものの考え方に対して、ちょっとイメージが違ったという点です。

それから、こういう国際会議をやって、一体どれだけの効果があるだろうかということですが、私はこういう会議をかりに日本でやったとしたら、かなりいろいろな意味で効果があるような気がいたします。これはまったく個人的な意見ですが、たとえば顔も知らないで、論文だけで知っていた人に実際に会って話を聞く、もしくはその人と親しく意見を戦わすことができる。これは学問の進歩の上で非常に大きな影響を残すと思います。それと同時に、そういう大会をしたということが非常に日本のORを進めていく上に大きな役割をするのじゃなかろうかと考えられます。

あとでイタリーのORの現状をお話しますが、イタリーのORの現状は日本よりもはるかに下であります。しかし、このような大会を開催したことによって、イタリーのORは急激に進歩すると思われます。それは国内のいろいろな意味の注意を喚起することになるでしょう。その意味で、私はある程度の困難があっても、それを克服してやるべきじゃないだろうかという意見を抱いて帰ってきたのであります。

ただし、やるとなれば相当たいへんであり、決して片手間にはできない。実はアリタリア航空のある人は、そのために半分病人になってしまったとのこと。それだけ熱心に関係者の方はやっておられて、なおかなり運営にミスがある。これはたいへんなことだと感じました。大体幾らぐらいお金がかかって、どういうふうになったのかということを知りましたが、実はやっている人はお金のことなどさっぱり念頭にないらしくて、要するに会議を運営するのに精いっぱいだったらしいようで、あまりはっきりした答は得られませんでした。

ですから学会としては、相当体力をつけておかないと、背伸びしてやったらたいへんだという一面、やればやっただけの効果はあるような気がいたします。

この大会を主催した側のイタリーのORの状況はどうかということについて、簡単に申しま

す。イタリーで OR がやられたのは1959年でした。この年に若い人たちが OR をやろうということで始めたのがその発足でありまして、ナショナル・リサーチ・カウンセルのグループをつくられたわけでありまして、その10年間の間に約70編ぐらいの論文が出ておりますから、日本の学会に比べると少ないということになります。それで主なものとしては、ミリタリー——これは国柄でしょうが——あとは郊外の交通についての OR を取り扱っているものが多く見られます。しかしこれ以前にも、すでに工業の部門の人は LP を1954年には着手していました。しかしそれはある一部でやっているだけで、学会としての活動はほとんどされていませんでした。

学会が初めてつくられたのは1961年で、かなり新しいわけです。そしてキャルコという雑誌がつくられたのが1964年でありまして、つまり数年前にそういう雑誌を発行したということです。

それから学校で OR の講座がつくられたのは1967年であり、非常に新しいわけです。

企業では大企業としてオリベッティであるとか、フィアットとか、IRI（道路公団の下請のような会社）、エジソンボルターとか、海運会社とかいうところでやっているようでした。その中でも一番よくやっているのがフィアット、IRI などのようであります。IRI の中には OR のテクニシャンが74名いるということで、かなりこの会社としてはやっているが、全体に定着しているというにはほど遠いように見られました。

イタリーの経営者は OR というものをそれほどまだ重視していません。ただ、イタリーの大きな会社ではそういうものよさを認め、かなりの人を投入しているようであります。全般的には非常にプアーである。

しかし国家の一部で問題を OR 的に取り扱う、という気運がさかんで、イタリーの特色の一つである計画経済の面ではかなり進んでいるようです。ちょうど日本における一時代前の時代に相当するようです。非常に——後進という悪いが、おくれたところでも OR の国際会議をやろうと思えばやれるということ。それは地域的にいえばヨーロッパであり、他の援助を受けるにも非常に楽ですが、そういう点では日本とは比較にならないでしょうけれども、日本の現状に比してかなり不利な中で行なってもやれるということは、日本が国際学会をやるに当たっての他山の石とすることができるでしょう。

最後に、私たちがロビーやパーティで何度となく、72年には日本でやってほしいとか、日本へ行きたいのだがということをお聞きされて、実は現在スチューデント・パワーがものすごく日本では72年にやれる状況にない、ということをお話したら、非常に残念そうな顔をしておりました。かなりの人が日本に行けることを楽しみにしておったようです。札幌の冬季オリンピックがあるのだから、そのとき来ればいいじゃないかと言ったら、いや、OR 屋はそういうところへ行く金を出してくれない、日本へ行くにはやはり学会がないと行けない、ということをお話しているのを1人ならず聞いたことがあります。

そういう意味で、全体のうちの少数かもしれませんが、やはり日本で OR 学会をやってほしいという意向はあったような気がいたします。

大体どんなことが行なわれたかということと、日本の私が出て行ったその辺の事情をお話して私の話を終わりたいと思います。